

別紙標準様式（第7条関係）

会 議 録

| | |
|-------------------------|--|
| 会 議 の 名 称 | 令和5年度第2回枚方市支援教育充実審議会 |
| 開 催 日 時 | 令和5年9月12日（火） 15時00分から17時00分まで |
| 開 催 場 所 | 枚方市教育文化センター（3階） |
| 出 席 者 | <p>会長 相澤 雅文（京都教育大学）</p> <p>副会長 山下 敦子（神戸常盤大学）</p> <p>委員 内田 順子（枚方市立小学校支援教育コーディネーター）</p> <p>委員 牧村 剛（枚方市PTA協議会）</p> <p>委員 小出 伶奈（枚方市立小学校保護者）</p> <p>委員 小寺 鐵也（種智院大学）</p> <p>委員 奥出 久実（大阪心理カウンセリングセンター）</p> <p>委員 井村 恵美（市民）</p> <p>委員 椀山 佐由里（枚方市立中学校長会）</p> <p>委員 東野 恵子（枚方市立中学校支援教育コーディネーター）</p> |
| オンライン出席者 | <p>委員 野口 晃菜（一般社団法人UNIVA）</p> <p>委員 廣井 理恵（枚方市立中学校保護者）</p> <p>委員 柏木 充（市立ひらかた病院）</p> |
| 欠 席 者 | <p>委員 武田 正道（枚方市立小学校長会）</p> <p>委員 渡邊 かおり（大阪弁護士会 萩の木法律事務所）</p> |
| 案 件 名 | <p>(1) 第1回枚方市支援教育充実審議会での意見を踏まえた論点について</p> <p>(2) 学校見学の様子について</p> <p>(3) その他</p> |
| 提出された資料等の名 称 | 資料1 第1回枚方市支援教育充実審議会での意見を踏まえた論点 (たたき台) |
| 決 定 事 項 | 公開 |
| 会議の公開、非公開の別 及び非公開の理由 | 公開（一部非公開） グループ協議内では、学校訪問の動画を視聴することから個人情報保護の観点より非公開を審議会で決定したもの |

| | |
|----------------------|---------------|
| 会議録の公表、非公表の別及び非公表の理由 | 公表 |
| 傍聴者の数 | 11人 |
| 所管部署 (事務局) | 学校教育部 児童生徒支援課 |

| 審 議 内 容 |
|---|
| <p><開会></p> <p>(会長) それでは、定刻となりましたので、枚方市支援教育充実審議会を始めさせていただきます。本日は、公私にわたりまして、それから、足元悪い中、お集りいただきまして、ありがとうございます。それでは、事務局から、本日の委員の出席状況と傍聴者について、報告をお願いいたします。</p> <p>(事務局) 本日の委員の出席状況ですが、委員15名中13名の出席をいただいております、委員の過半数に達しておりますので、枚方市附属機関条例第5条第2項に基づき、本会議は成立していることを報告いたします。また、本日の傍聴者は、11名でございます。以上でございます。</p> <p>(会長) ありがとうございます。前は初回ということもあり、参加していただいた委員の方々に一人ずつ順番にご意見を伺いながら進めさせていただきましたが、短い時間の中でより多くのご意見を頂き、議論を深めるために、今回はグループを設定したうえで、グループで出た意見をまとめていく形で審議会を進めたいと思っておりますが、いかがでしょうか。</p> <p>《異議なし》</p> <p>それでは、案件1「第1回枚方市支援教育充実審議会での意見を踏まえた論点について」こちらの資料については、事前に送付があったものと思いますが、第1回で頂いた意見をカテゴリ別にまとめていただきました。この内容以外にも課題はあると思いますが、新たに問題提起されたものについては事務局の方で3回目以降の議題としていただくことも検討していきます。事務局から説明をお願いします。</p> <p>(事務局) 配付資料の確認をさせていただきます。本日の資料は、「第1回枚方市支援教育充実審議会での意見を踏まえた論点(たたき台)」でございます。資料をご覧ください。</p> <p>第1回審議会にてご意見いただいたキーワードを整理したものとなっております。テーマとして、①インクルーシブ教育の充実 ②枚方の支援教育の制度 ③学びの場 ④教員 ⑤就学前・関係機関連携 ⑥学校 の6点のカテゴリでまとめさせていただきました。</p> <p>次のページをご覧ください。</p> <p>まず1点目は、インクルーシブ教育の充実についてです。これまでの枚方市の支援教育を総括するうえで、「ともに学び、ともに育つ」ためのインクルーシブ理念の共通理解の必要性がご意見として挙げられました。学校、教員、児童、生徒、保護者など、それぞれが違う認識を持っているため、議論を進めるにあたり、共通理解を図ることが大切であるとの意見がありました。</p> <p>次のページをご覧ください。2点目は枚方の支援教育の制度についてです。これまでの</p> |

枚方市の支援教育を総括するためには、特別の教育課程としての自立活動が適切に実施されているかを含めた子どもたちの学習内容の把握が必要との意見でした。適切な支援教育を実施するためには、児童生徒に関わる全ての大人が適切に支援教育を理解していることが必要であり、現状の把握を含めた意見収集が必要です。加えて、文部科学省の示す制度理解を進める必要があります。また、枚方市内小学校で実施しているダブルカウントの制度については、少人数学級編成を実現できることによる学びの場としての環境整備が行われております。しかしながら、教員不足が加速している状況下では、人材が足りない現状を踏まえて検討する必要があります。

次のページをご覧ください。3点目は、学びの場についてです。本年度より、中学校全校に通級指導教室を設置したことにより、通常の学級、支援学級に加えた学びの選択が可能になり、通常の学級に在籍しながら通常の学級で学ぶための自立活動をおこなうことができるようになりました。しかしながら、あくまでも「ともに学びともに育つ」教育の実現をめざしたものであり、通常の学級の基礎的環境整備、適切な配慮を含む合理的配慮を適切に行い、多様性を理解したうえで個別最適な学びを進める必要性が挙げられました。同時に、児童生徒自身が支援教育に対して納得感をもって教育を受けることができているのかが問題提起されました。こちらについては、児童生徒自身にアンケート調査を実施することや、保護者だけではなく、関係性のある教員が直接意見を聞く機会を設ける必要があるのではないかと考えます。

次のページをご覧ください。4点目は、教員についてです。学びの場がどこであっても、学校の体制としてチーム体制が構築される必要があるという意見でした。在籍が支援学級であると、支援学級担任と通常の学級担任の連携はもちろん、支援コーディネータを中心とした体制の中で、合理的配慮や基礎的環境整備を通常の学級で整えることで「ともに学び、ともに育つ」が実現できることが大切とのことでした。同時に、支援教育の専門性の向上という課題では、教員のスキルアップの必要性があげられ、教員研修の充実も必要とのことでした。また、不登校傾向の児童が増加していることで、広い意味での人的な支援サポートの必要性も課題とされました。教員が不足している中、学校としての人材の確保が喫緊の課題とされています。

次のページをご覧ください。5点目は、就学前・関係機関連携についてです。就学前から児童の情報を適切に共有するために、連携の強化が課題とされました。また、教育相談として学校と相談機関の意見交換により、保護者の納得のある相談の実現が求められているのではないかとという意見もございました。

次のページをご覧ください。6点目は、学校についてです。まず、前提として、障害理解教育の充実、中学校への適切な引継ぎ、チーム体制の構築と対応の徹底について、特別の教育課程の適切な実施について、学校間の差があるのではないかとという意見でした。また、保護者はもちろん、児童生徒が納得した在籍、教育内容となっているかという合意形成の課題、クラブ等への参加の配慮についてという課題があげられました。以上です。

(会長) ありがとうございます。こちらの資料について、現時点で何かご意見のある方はおられますでしょうか。

《質疑なし》

(会長) それでは、案件2『学校見学の様子について』です。

前回、事務局より提案されましたものとして、通常の学級、支援学級、通級指導教室で学習する内容、いわゆる『教育課程について』や、学びを支える『教員の確保について』議論いただきたいという提案がありましたが、先日の学校訪問を経て、まず現状の支援教

育を見ていただいたことを踏まえて、基本的な内容について議論するほうが良いのではないかと考えましたので、こちらから進めたいと思いますが宜しいでしょうか。

《異議なし》

ありがとうございます。

今回の議論としては、先日の学校訪問の様子を含めた支援教育の現状について、KPT方式で議論できればと考えています。KPTのKにつきましては、KEEP（継続が望ましい点）、PにつきましてはPROBLEM（課題と考えられる点）TにつきましてはTRY（課題の解決への方策）という捉えです。前半の議論としては、KEEP（継続が望ましい点）とPROBLEM（課題と考えられる点）についてご意見を交流していただこうと思います。後半の議論につきましては、TRY（課題の解決への方策）について意見を頂きながら少しでも方向性をまとめられればと思っています。このような形で進めたいと考えておりますがいかがでしょうか。

《異議なし》

ありがとうございます。

次に、論点が多岐にわたると意見を深めることが難しいと思いますので、今回は先ほどの資料を踏まえた観点を4つ、準備しました。1つめは、『自立活動の在り方について』2つめは、『支援教育での学習内容の在り方について』3つめは、『小学校・中学校 校種間の差について』4つめは、『個のニーズに応じた支援教育の在り方について』です。

9月7日（木）に実施された学校訪問については、事務局から動画配信をしていただき、事前に視聴できるようお願い致しました。しかしながら、日数が少ない上に多忙な委員の皆様の中には視聴できなかった方々もおられると思いますので、当日の動画を観ながら議論できるよう準備して頂きました。また、事務局には、各観点についてグループで意見をまとめていただくために、ワークシートを準備して頂いたものが机上に配付されていると思います。こちらを使っていただき、議論を進めていただきたいと思います。事務局には、記録作業と発表、また委員の質問があれば対応をお願いします。

なお、前半の議論につきましては、学校訪問の動画を視聴することから、個人情報保護の観点より非公開としてはどうかと思いますが、皆様いかがでしょうか。

《異議なし》

では、動画を観ながらの議論となる間は、傍聴人は一度ご退席願います。議論内容の発表から再入場いただきますのでご了承ください。

《傍聴人退場》

では、前半の議論は約20分を設定しています。宜しくお願い致します。

○グループ構成につて

Aグループ（相澤会長・東野委員・牧村委員・小出委員・井村委員）

Bグループ（山下副会長・奥出委員・小寺委員・椛山委員・内田委員・柏木委員（オンライン）・廣井委員（オンライン）・野口委員（オンライン））

Aグループ協議

（会長）動画を見ながら、気付いたことなどがありましたら発言をお願いします。保護者としてはどうでしょうか。

（井村委員）私の娘は香里小学校でした。でも私は、子どもの立場だったら1対1は嫌なんです。自分は、ある意味虐待を受けているような気分になります。すごくしんどいな

と思いますけど。

(会長) たくさんの方が良いっている感じですかね。小集団の方が良い。

(井村委員) 香里小学校でやっていた時に、基本は通常の教室で過ごすことが一番だと思っていますけど、支援教室で過ごすときに、例えばお買い物ごっこみたいな感じの学習スタイルで、この子が店員さんになって挨拶ができる練習とか、この子は計算する練習とか、この子はお買い物する時に、カードを見て買い物として商品取るとか、一緒のことをしながら。学習は一緒にするけどみんなそれぞれ課題に向かっていた。あと、みんなで一緒に演劇をして、発表の場を作ってクラスの人にも見てもらうとか、そういうことをやっていて、いいなどは思っていた。

(会長) 生活科の単元学習ですね。

(井村委員) 専門的な用語は分からないですが、個別というのはすごくしんどいという風に思っていた。

(小出委員) お手本となる友達を見た方が今はいいと思っていて、私が見ているのは集団も結構多い。4.5人で算数を一緒にしている、1対1や2対1になっているところが香里小学校の特徴かなと思っている。通常の学級については、弱視学級児童の付き添い指導のみ見れたので残りは分からないです。

(井村委員) 本人が多対一を望んでいる場合は良いと思うが、本人の確認がなく保護者の意見だけで決めているのは反対です。

(会長) 今日の観点は、自立活動のあり方についてということと、支援教育の学習内容のあり方についてです。あとは、小学校、中学校の校種間の違いということもあったかと思えます。加えて、個のニーズに応じた支援教育のあり方についてということで、続けていく方がよいと思うところと、課題になってると思われるところを、授業を見ていただきながらご意見をいただきたいということが前半の部分になります。

今、話題となっていたのが、いわゆる個別が良いのか、それとも、ある程度の集団を作った活動があった方が良いのかという風に思いましたけども、いかがでしょうか。見せていただいた小学校の取り組みだと、個別に先生がついて学習を行っているというようなことでした。お話を伺うと1日に2時間はそういった時間を支援学級の中でも作っているということで、他の時間については、通常の学級で学習を行っているというような形式になっている。学級によっても多少違うかもしれませんが。自閉症情緒障害学級のお子さんたちは、基本的には通常の学級に準じた学習を行っています。知的な遅れのある方は、体験を合わせた指導のような形で、活動を中心とした中でその子の目標を設定して学習をする形になっているという違いはあります。

(東野委員) 私は中学校で勤務しているので、小学校の様子を見て思いましたが、今、個別で対応しておられて、実際自分の学校がどうかというと、2学級ですので、こんなに、1対1対応はほとんどできてません。多くて、1対3もありえます。で、1つの教室に8人ぐらいいて、先生が3人ぐらいというパターンもある。だから、小学校ですごく丁寧にさせていただいて、中学校に来て、さっき言うておられたように集団の中で過ごす、3年生と1年生がいたら、3年生はこんなことを勉強してるんだとか、こんなことしてるんだというのを学びながら1年生も育てているという良いところはあるかなと思ながら日々やっている。ただ、実際問題、2年生、3年生になってくると、だんだんやっぱその集団の中に入っていきたいという欲がどんどん出てきて、今日は支援学級行かずに通常の学級で頑張りますという子も年々増えてきてるのは事実としてあって、そういう意味では、集団の中で勉強して、少しずつ通常の学級に行くという流れになるのはすごくいいか

なと思いました。現実的には中学校では1対1対応はほとんどできてません。

(会長) 自閉症情緒障害学級の場合には、中学校までしか基本的には特別支援学級作られていないので、卒業した後は高等学校であるとかに入っていかなきゃいけないというようなことがあります。実際卒業した方とかはどうですか。

(東野委員) 私たちは口酸っぱく子どもたちに言って。先生たちはサポートたくさんずっとしてあげたいけど、実際高校に行くとそのサポートがどんどんなくなってくるといふか、ほとんどない状態で高校に行かないといけないと伝えていますが、「先生ついてきてくれないの?」という感じの子もいます。でも、それなりにみんなの流れについてやっていけているというのは、よく聞きます。

(会長) 通常の学級に入りながらというのは小学校でも行われているわけですけど、この映像を見ると小学校は、割と手厚く1対1、1対2ぐらいのところでの取り組みをおこなっていて、少しずつ集団を大きくして、もっと大きな通常の学級に入れるという風なことも増やしていきながら、次のステップに繋げてくというのが自閉症情緒障害学級の取り組みの形としてはあるだろうということですね。あとは、自立活動というのも1時間のすべてを行うわけではなく、1時間の中で流れを決めて活動を行っているというような取組もあるようです。あいさつをして、自立活動をして、学習をして、自立活動して、おしまいというところもありましたし、挨拶をして、自立活動をして、図形学習をして、挨拶して、おしまいというような感じですかね。中学校の自立活動というのはどんな感じでしょうか。

(東野委員) 色々あるんですけど、例えば、プリント整理ができないのどうしたら良いかとかっていうのも週に1回としたりとか、緘黙の子とかもいるんですけど、その子は別の教室に行って1対1で最近したことなどを話すだとか、3年生の子とか、1年生合わせて喋るトレーニングのようなことをしたりしています。

(会長) 選択制緘黙という日中はたくさん話せるけど、場所が変わるとお話ができない、ほとんど喋らないみたいなお子さんでも自閉症情緒障害学級にはいますね。自立活動と教科指導というような指導がありますが、そのあたりのバランスであるとか、その内容であるとか、活動とかはどう意識されてますか。

(小出委員) 動画の小学校は1時間の中で分けてると感じだと思うんですけど、うちの学校の子どもは日々、生活の中に自立活動を入れ込んでくれています。例えば、言葉が出にくい場合は、先生が代弁してくださって、子どもが自分で思いを言えるように声掛けすることや、言いたいことと違う言葉で言っている場合があれば、教師が発音のお手本を見せてくれたり、お箸を持つ場面でも、タイミングを見て付き添って教えてくれたりしています。それは自立活動じゃないのかな。

(会長) 自立活動も、時間内の指導と時間外の指導というのがあって、日常生活の中で自立活動の内容を取り組んでいくのと、時間を取って重点的にその子の課題や課題解決に向けた取り組みを行っていくやり方があります。最近、その時間を取って自立活動をやりましょうというようなことが進められてきているかなという風には思います。元々は特別支援学校にしかなかったんですけど、それが通級指導教室でもとか、特別支援学級の中でもどんどん取り入れてくださいねという感じですが。特別支援学級でも行われていたんですけど、自閉症情緒障害学級の子どもたちとか、知的な遅れである子どもたちの学級でも自立活動の時間を確保してという流れが出てきてはいます。

(東野委員) そういう感じですね。

(小出委員) この中学校でも、週に2回は校内ピアーズに取り組んでいるとのことでした

ね。

(東野委員) 日々取り組んでいますね。多分、多くの学校で。

(会長) 割と集まって取り組んでいるようですね。コミュニケーションであると、人間関係の形成を目的に、みんなの顔が見える状況で話し合いをしていくというようなやり方ですね。意見を聞いて、順番を守って話すとか。あと、私が見せていただいた小学校の自閉症情緒障害学級のような形は、通級指導教室で行っている学習の内容と似てるなど思ったんです。ただ、通級指導教室が作られたというようなことが枚方ではあって、それと特別支援学級の差別化と言いますか、違いというのかな、それをどうしていけば良いんだろうというようなことなども考えていく必要があるんじゃないかなと思います。

(小出委員) 現状で、通級指導教室がある学校は、先生が1人いらっしゃると思うんですけど、他校通級は週に1回程度しかその授業が受けられない。通級は週に1回、2回とかだと思うんですけど、やっぱりそれじゃ足りないというか、1日1回は支援が必要という子は支援学級かなと思っています。この視察の時間ではみんな落ち着いてたかもしれないですが、学校の先生に聞くと、他の時間ですごく荒れている場合もある。でも、1対1で先生と話す時間が毎日あると、やっぱりその子の情緒が落ち着いてたりして、また頑張れるというのも結構あると思っています。まだ毎日じゃなくなるには早いなという子はいる。

(会長) 制度上、通級指導教室は週に8時間通えますよね。

(小出委員) 制度上は行けるけど、1対1のシミュレーションしか文科省は出してないので、結局1対1となると難しいなというのもあり、何時間も通えないという感じです。

(会長) 希望者が多いと、複数や小集団で指導しているところもあり、その子どもたちのマッチングというのを考えないといけなくて、そこでも大体週に1回、2回通えたらというような状況が今は多いですね。

(小出委員) 週に1回では、自立活動だけじゃなくて、学習面だったり、情緒の面で毎日必要っていう子もたくさんいるので、そういう子をまだ早い時期に通級に促してしまっていて、結局荒れてしまっていてとなると、学級崩壊の方向にも繋がりがねないと思ってるので、きちんと時期を見定めて、将来に向けてやっていくのがいいのかなと思います。もちろんめざすところは、卒業するまでにとか、もっと早い段階で自立に向けていけたらいいとは思いますが、その子によって特性の強さも違うと思います。

(会長) 毎日通える場所があった方がいい子もいるということですかね。

(小出委員) その子によると思うんですけど、自分のことを気にしてくれてる大人がいるかないかで安定が違う子はたくさんいると思うので、放っておかれているなというふうに感じると不登校にもなったり、飛び出して暴れたりとか、そういう子も結構いるなと思っていて、逆に支援学級の先生と1対1の時間を取っていくと、だんだん落ち着いてきたなというのも外から見ても思うことがあるので、やっぱり小さい時にどれだけ向き合ってもらえたかというのも、将来のためになっているのではと思います。

(井村委員) 分かります。ただ、それは支援学級の役割なのかなとは思いますが。それは全ての子どもたちに必要なことだとは思いますが。

(会長) 費用対効果という面では、特別支援学級は8人の児童生徒に1人の先生なんです。通級指導教室は13人に1人っていう風に段階的に定数化が進められています。あとは、週8時間で最高でなのか、もっと時間を必要としている子どもたちがいるのかというような観点では、通級指導教室と特別支援学級の連続性と言えるのかもしれませんが、通級指導教室の限度を超える必要なニーズがあるけれど、今のお話では、毎日先生に会える、子

どもが行ける場所がある、落ち着ける、クールダウンできるような場所があったりするというようなことが必要なのではないかというようなご意見は出していただけたかと思います。

(牧村委員) 今、息子が中3なんですけど、当時、息子が小学校の3年生ぐらいから支援に入るようになりまして、中学校2年になり支援学級はやめたんですけど。息子が中学前ぐらいか、中学校ぐらいによく言っていた言葉が「小学校で恥をかかされた」でした。それは、通常の学級から支援学級に行くときに前に立たされて、「行ってきます」と言わなければならなかった。それが、嫌で嫌でということだったり、親が支援学級に行かせやがってということがあった。親は、良かれと思い決断したんですけど、子どもからすると傷つくというか、嫌だった。教室でみんなと勉強がしたい。わからなくても良いという感じだった。中学に入っても支援学級在籍だったんですけど、「絶対に行かない。」「ばれたくないわ。」という感じだった。思春期になるとその辺が難しいなと感じた。未だに小学校の頃のことはトラウマで、いつも挨拶していかなければいけないというのはね。

(小出委員) 全部の学校じゃないとは思いますが、枚方は結構「行ってきます」と言うパターンが多い。障害が明らかに見える子には良いと思うんですけども、しっかり喋れるけど、ちょっと特性があるかなという子には、本当に辛いんじゃないかなって。

(井村委員) でも、多分ね。「行ってきます。」というのを言ってなかったとしても、なんであの子この時間いないのかなとなるじゃないですか。一緒だと思います。私は、先程のお話聞いていて、そういう落ち着ける時間って必要だと思っています。でもそれは障害があるない関係がないと思っている。要は不登校の子も一緒に、ほっとできる時間がないと教室がしんどい。その部分をまず変えていかなければ支援教育を充実したところで、結局根本の部分に至っていない。だから学校の教室も、もっと居心地が良い状況をみんなで作るように今の教育の在り方をまず考え直さないといけない。理想としては、ほっとできる別室を作ること。その教室に先生を1人、話聞いてくれる先生がいて、障害のある子もない子もみんな行けるようになると恥もかかないし、みんなが言えると思う。枚方全体で、国の制度のぎりぎりのところでいいから、やり方を根本から変えていけたら、先生方ももっとワクワクしながら仕事ができるような教室を作っていけたら。

(会長) 基本的にインクルーシブというのは、特別な支援が必要な子どもたちがいるところの制度だけではなくて、その他の子どもたちも含めた中で、どう理解を進めていくかということが大切ですからね。そういったことはこれからトライすることで、また次の話題でもお話できればと思います。しかし、何かしらの配慮があればよかったのか、それとも、本人の気持ちを聞いているかという問題ですね。

(牧村委員) 子どもの意見を聞けていたのかなという風を感じている。息子から言われて、そうだなと。

(小出委員) 「行ってきます。」が嫌だと言われたのはいつ頃ですか。支援学級に入ってからすぐとかですか。先生に言っても、それはもう学校スタイルなのでと言われた感じですか。

(牧村委員)、思っていたのは入ってすぐとかですね。でも、そういうことを息子は何年か経ってから言うんですけど、その当時は言わなかった。

(井村委員) 子どもは見えないんですよ。親とか周りの先生はみんな良かれと思っているのは絶対ですよ。本人のために一生懸命みんな頑張ってくれているけど、本人の意思をもっと聞こうというのはなくて、理由は子どもに聞いてもわからないと思ってしまう。私もそうだった。うちの娘は言葉が喋れないですけど、喋れないながらも感じる部分というのはあります。本人が周りの子どもたちとの関わりを見ながら、どうい

ふうな思いをしてるかというのは、常に感じようとしている。先生方こそ保護者以上に教育のプロなので感じられると思うので、本人参加、自己決定という意味で子どもたちの気持ちに寄り添いながらどうしていくのかということも課題になりますね。

(小出委員) 個のニーズに応じた支援教育のあり方になるのかなと思ったのですが、「いってらっしゃい」を言うか言わないかとかも、個に合わせる必要がある。でも、特に中学校で「いってらっしゃい」とかは嫌だとか、最初のお手紙も嫌だというのはよく聞くので、嫌という意見があるのなら、支援の担任になった先生は本人にどうするかを聞いてほしいなどは思う。先生は度々変わると思うんですけど。

(会長) special needs education というのを日本は特別支援教育と訳していますが、そうではなくて個別の special needs に対応した教育なんですよね。特別に何かしてあげるんじゃなくて、1人1人の必要なことにサポートするというのが基本ではあると思う。でも、特別なことしてもらおうと、特別なことをするんだみたいところが、学校の中でも子どもたちも、なんだか特別にしてもらおうという感じで親も特別なことになるのかみたいな感じになっているのかなと思うし、そこから脱却して、この子に必要なことはこれなんですというのが、多分他の子にも本当はあるはず。そこにみんな対応してんいるんだよというような、フランクな感じになっていくといいんだろうなとは思う。ですから、プライドもあるし、知識が高まってくると、なんでこんなこと言わなきゃいけないんだろうとか、どこ行くのとかと言われて、はっきり答えることができないような状況だったりとか。その子にとって難しさというところに繋がっていくだろうなという風には思う。

(小出委員) 学校によるのかもしれないですが、支援学級に行くのが別に変なことじゃないっていう雰囲気のところもあるし、結構勉強ができる地域だと、「あの子は支援学級に行ってるんや」となりやすいかなと思う。そのあたりは先生たちが、春の段階で最初に説明すると思いますが、周りへの伝え方についても「こう伝えればよかったよ」というのが先生たちの中であるのなら共有してもらえたらと思う。

(東野委員) 支援開きね。丁寧にはやっていますが、さっきおっしゃってた手紙も必ずお家の方と話すときに、まず第一に本人が「書いてほしい。書いてほしくない」からまず聞いてくださいと。本人が嫌がっているのでいりません、中には自分で自分のことを説明したいという子もいて、こういうのが苦手なので、こう協力してもらえたら嬉しいというのを読んでる子もいて、それはそれですごく子どもたちに伝わって、教室として、音が苦手な場合は「拍手を少し小さくした方がいい？」とか、聞きに行ったりとかして、なんかすごくあったかいなっているものもあるから、必ず本人の意思は大事だなというのは感じる場所があるので、それが共有できたらなとは確かに思う。

(小出委員) 4月の最初は先生たちも忙しいと思いますが、ちょっとでもいいから共有できる時間があればいいですね。年度初めに映像で毎年見るような感じで動画を作れたら、支援の先生になったらこれを見てくださいねという感じで残しておくとか。今までは通常の学級の教育課程をやってきた先生も、支援学級が初めてという方もたくさんいると思いますので、内容もどうしたらいいんだろうとなると思う。

(会長) どこでもその傾向はあって、他の自治体の特別支援学級の初任の先生の研修会をしています。小学校で100人ぐらいいる。その県の中で。中学校は50人ぐらい。毎年先生が変わるところは結構あって、そういった専門性をどう保障していくのか、担保していくのかということは、結構大切なことではあるかなとは思っています。色々な人が経験するというのも良いかもしれないけれど、子どもたちにしたら、どういうことかわかってない先生は大変なところはあるだろうなとは思っていますね。

(東野委員) そうだと思います。

(牧村委員) 今までね、すごく怖くて恐れられてた先生が、支援の先生になられてびっくりするぐらい優しくなったというような意見を聞いた。

(会長) それはやっぱり、その方がどう思って取り組むということによって変わってくると思う。たくさんのご意見がいただきました。ありがとうございます。

B グループ協議

(全員) よろしくをお願いします。

(山下委員) 随時、オンラインのほうでも発言をお願いします。

四つの観点について、意見交流と課題整理するということですが、参観はされていますか。私は動画だったんですが、今一度振り返りますか。まず最初に、自立活動の在り方についてありますが、事務局からも資料があるとのことですので紹介をお願いします。

(事務局) 自立活動は、御覧のとおり大きく6項目27観点になります。各学校のほうで時間割を見やすく視覚的に支援するでありますとか、初めてクラスに入るような場合は、事前に知らせて見通しを立てたうえで進める。体育館のような場所で大勢の中に入るようなときは段階を踏んで配慮するということを行っています。環境では、書くことについて困り感を持つ子については音声入力なども一人一台端末などでサポートしています。体の動きとしては、紐を結ぶトレーニングなどがございまして、児童がわかりやすくなるように色を分けながら靴紐やリボンなどを実際に結んで練習することもあります。コグトレ棒のトレーニングでは、赤・青・黄色の部分でキャッチするトレーニングをします。コミュニケーションでは、SSTとしてロールプレイをし、ルールや手順を学ぶようなトレーニングを行っています。以上です。

(山下委員) ありがとうございます。見学とか視聴された内容を踏まえて自由に良かった点や疑問点などをざっくばらんに話していきましょう。支援教育での学習内容の在り方や自立活動の在り方の二つについて話した後、個別のニーズについて話していきます。どんなにか意見、感想はございますか

(奥出委員) 20年ほど前から枚方市の支援教育に携わらせていただいています。大体2年周期で学校に行かせていただいています。今まで見た枚方の雰囲気としては、授業も落ち着いています。課題としては、障害別に課題が分けられていないこと、先生方も誰に、どんな障害にという苦手なところに焦点をフォーカスしていくと得意なところが止まってしまう。だから、必ずしもプラスではないこともあると思う。ただ、後遺障害やリハビリなどについては効果的かと思うので、一般的に障害にこういったやり方がいいという考え方は自閉タイプの子どもはしんどくなることもあり、結果的に自傷行為も増えることもある。自傷行為や情動行動のストレスシグナルであることもわかってくださる先生方もどのくらいいるのか。実際に学校見学の時も、言葉を発しなかった子さんが縄跳びをしていた。頑張るんだけど縄跳びをした後に情動行動が出ていた。彼女が自立活動としても縄跳びはむず痒いんです。何回という課題のある小学校もありますが、ほどほどにということを他市でも言っています。親御さんが必死になって家に帰って縄跳びをさせている、どんどん自傷行為がひどくなる。かさぶたをとったり噛みつくなどできない自分を責めてしまってしまう。だからできることに目を向かせるためには、あまり出来ないことに取り組みせないということも大切。彼女は中学生で、何百回も飛ぶということでしたが、その練習にどれほどの練習をして工夫されたのかなと思うと見ていられなかった。先生方は、障害の特徴としてどのくらい理解してくれているのかなと思いました。本人が頑張りますと

言ったら、がんばろう！ではなくて、それがその子に合っているのかとか、嫌ならやめてもいいんだよどういうに知らせていくか、無理にさせた場合それが非常に難しいと感じました。コミュニケーションの対人関係の取り組みとしてとして、例えばクラスで何か話していましたが、良い子たちにも、手伝ってと言えないのかな？というアプローチがあったが、それは、先生方からすると良いことなんだと思いますが、できない子からすると答えが限定している。友達が良い子たちということと、自分が言えないことは別。先生とのコミュニケーションに対する意識というのもスキルアップが必要と感じた。障害に応じた対応、特徴、もっと細かに知っていただきたいと感じました。

(山下委員) 障害の種別に分けたほうが効果的というようなお話もありましたけれど、実際に見られて充実していた部分についてはいかがでしょうか。

(内田委員) 小学校の様子を見ていたら1対1が多かった。自分の学校では3・4対1。それが一番大きな違いだった。障害種別で苦手な部分にフォーカスする理由として、私たちは体育が嫌いになってほしくないとか、どこかで跳べないより跳べたほうがいいたろうとか、縄跳びが嫌だから行きたくないとならないようにしていると感じた。確かに、どこまでできたらOKというのを決めるのは相談のうえで決めているが、本人の意思かどうかというのは改めて聞かなければならないと思った。学習面にしても、できるなら当該学年と思っている。「下学年の学習から復習しませんか。」と提案するまでに時間をかけてしまっている。教師として提案するのに勇気がある。やっている内容と本人の発達にずれがあることは感じている。コグトレ棒にしても、少しでも不器用さが改善するかな、手首が柔らかくなったほうがいいかなとか、広く浅くなってしまっていることは大いにある。

(山下委員) 個別のニーズに応じたことについても、もう少し幅を広く意見を交流したい。私も動画を見ていて、割と1対1が多いのかなと思った。もう少しグループ学習やコミュニケーションなども中学校では少しありましたが、1対1ばかりが中心になるのではないだろうけど。中学校ではいかがでしょうか。

(樺山委員) 中学校になると、もっと学習についての要望が保護者からでる。本人たちからも教室の勉強についていきたいという思いを聞くので、学習の比重が大きくなっている。支援教育は自立活動、コミュニケーションが大切だと感じているので、グループでSSTをしたり、みんなで畑をしたりしているが、子どもたちが気になるのは学習面。小学校、中学校という校種間の差となってくるが、学習面に力が注がれているなという気がしている。そうすると個別の支援が多くなる。その中でも、集団で過ごしながら個別対応をしていくという場面が必要。ずっと1対1の体制がとれるかという問題もあるので、何人かで一緒に生活をしながら個別対応をするのが中学校では多いように思う。自立活動も社会に出るために身につけさせてあげたいと思っているが、教師は何かを教えたいという気持ちもあり、何かをできるようにさせてあげたいという気持ちから先ほどの無理をさせてしまったりということや、苦手なことを苦手じゃなくなるようにしてあげたいという思いで頑張りなさいという言葉になってしまう。教師だけではそういう専門的な知識は身につかない。ものすごく専門的かと言われるばそういうのではないかもしれないが、スキルという意味では必要だと思う。

(小寺委員) 私は枚方の教育理念「ともに学び、ともに育つ」場は設定しているが、ともに育っていることが見えてこない。支援コーディネーターも、ともに学ぶと言っているが、いてるだけでともに学んでいるということが見えない。形にこだわらず、中身について、どういう子どもに育ててほしいとか共有しながら「ともに育つ」ための手立てを学級で持つのかとか、そういう方法論を作らないと何のためのインクルーシブ教育なのかが、形だ

けにこだわっているように思ってしまう。実のある教育実践にしてほしいと思うので、どういう子どもに育ててほしいというのが一番大切。子どもが社会人になったとき、どういうイメージがあるのか、どういう生活をしてお金を稼ぐのか就労や住まいはどのようにするのか、いろいろな課題がある。そのあたりを含めた教育の一貫性を考える必要がある。難しい問題。

(奥出委員) 先生方がこうなってほしいと思ってくれているのは、親御さんにとってはありがたいと思う。先生が自分の子どもを見てくれているということに対して心強い。ただ、誰のための課題なのか、先生方の気持ちももちろんだが、子どもを中心に考えると親の願いすら子どもにとっては負担になることもある。そうすると子どももできないことを無理させてしまうと、子どもが無理していることに気づけなくなってしまうこともある。「ともに育つ」ということについて平等ということについて、自分たちと同じ環境に置くことがすべてではないこともある。違いを認めながらともに育つこともあると思うので、うやむやにするのではなく、だれのための課題かということも明確にしなくてはならない。保護者には厳しい言葉になるかもしれないが。

(野口委員) 自立活動についてどういったものが良いのかについて。個別の支援計画の中で、本人の願いを書かなくてはならないとなっている。優先順位を決めるときに、本人が何ができるようになりたい、本人が何を学びたいと思っているのか、そういった視点が大切。本人の意見をもって自立活動を設定していく。子どもによっては、好きなこと得意なことを伸ばしたい子もいれば、苦手なことを克服したいと考える子もいる。どちらが正しいというのではなく、本人がどうしたいのかという思いをベースに優先順位を考えていくのが一番良いと思う。先生方や保護者の意見もあると思うが。もう一つは、自身の障害理解、特徴理解、合理的配慮について。特に自閉症情緒障害がある子については、高校大学と進学するうえで、合理的配慮は権利となるので、どういった配慮があれば自分が学ぶことができるのかを知ることが大切。読み書き困難であればタブレットでこういった方法で学べばいいとか、指示が難しいのであれば視覚的に支援してくれれば良いとか、自己理解や合理的配慮を相手に意思表示していくのかについては、特に小学校高学年や中学校の自立活動のなかで扱って、また個別支援の中で扱って通常の学級で生かしていく。集団の中で合理的配慮を実践していくことが「ともに学び、ともに育つ」ことにつながっていくのではないかと思う。子どもの学ぶ権利、その場にいる権利ということを尊重した自立活動を進めていくことが大切だと考える。

(山下委員) 障害理解について本人の願いを整理することをどのように指導の中に入れていくのが大切。指導していれば、あれもいい、これもいいといういろいろな方法を入れてしまうので、何が目的だったのかという感じに見えにくくなってしまう。

(奥出委員) 今言われたことができるようなお子さんはそれでいい。自分の気持ちは、お母さんが喜んだこと、それが自分のしたいことだと思い込んでいるレベルの子たちについて話している。その子がそういったからということであれば、そういった子たちもいるので、想像してもらいたいと思っているし、障害について理解してほしいと思っている。

(山下委員) こう言った議論が個のニーズの難しさを表していると思うので、スタンダードを決めることが難しい。

(会長) ありがとうございます。それでは発表の準備及び傍聴人の再入場となりますので、しばらくお待ちください。

《傍聴人再入場》

それでは、A グループの発表をお願いします。

A グループ発表

(事務局) 継続が望ましいことについては、自立活動の意味づけが明確であるべき。自立活動については、1 時間の場合もあれば、日常に取り入れる場合もあるので、バランスが大事。訪問校では、1 時間の中に入れていたケースもあったので効果的だなと思う場面もあった。課題と考えられる点は時間数。障害に応じた支援の時間数が多ければもちろん支援学級であるべきという意見があるが、通級から支援学級に移る判断については時間数ありきではないが、子どもたちが1 日のうちに1 時間でも安心できる時間があることが子どもたちの成長につながっていくという意見。

個のニーズについて。子どもの意見を聞くことが大切であるということ。周りの子どもたちへの説明。教師の専門性を高めること。事例として紹介すると、子どもが支援学級に行くときに「行ってきます」という発言について。当時は何も言わなかったが、中学校になったときに、とても恥ずかしかったということがあったので、子どもの意見を聞くことは本当に大事だなという意見だった。「行ってきます」と言わなかったとしても、教室にいない状況はあるので、周りへの説明や、君はどうしたい？という風にしっかりとくみ取るべき。支援学級だけではなく、不登校の子や外国にルーツがある子たちにも言えることであり、支援教育を充実させることだけが、子どもたちが居心地のいい場所になることではない。通常の学級でもどのように運営するかということが大切。

(会長) ありがとうございます。次に、B グループの発表をお願いします。

B グループ発表

(事務局) 課題と考える点は、障害別に課題が分けられていないのではないのか。自閉タイプ子どものシグナルをとらえる教師がどれくらいいるのか。できないことに取り組んでいるが、できる部分を認められる状況になっていない。本人が進んで課題に取り組むための環境づくりが大切なのではないか。保護者にとっては、どう育てほしいかということも大切だが、子どもが主になっているかということが大切。個別の支援計画について、本人の意見を聞かなくてはならないとあるが本人が好きなことを伸ばしたいという子もいる、苦手を克服したい子もいる。何を学ぶべきかは子どもを主語に考えることが大切。将来的に社会に出るときに、自身の合理的配慮をしっかりと把握して、どういった配慮があれば自分が理解できるのか、意思表示していくかも非常に大事。本人の障害理解が大切ではあるが、そういったことを理解することも難しい子もいるので、障害のレベルによって考える必要もある。中学校では、学習のニーズが高まる時でもあるので、SST やコミュニケーションといった自立活動をしたいという部分もあるが、保護者や本人として学習のニーズがありとても難しい。支援教育としてスタンダードを作ることはとても難しい。

(会長) 自立活動の在り方について、学校訪問では一時間の中での取り組みが小学校でもあった。中学校では集団でもあった。小学校では、個別や少人数で過ごしながら、通常の学級でも過ごす。中学校では、もう少し大きな集団の中で過ごして行くという感じ。特別支援学級の自閉症情緒障害学級というのは、中学校までしかない。その先の高等学校についての意向を意識していくことが大切。支援教育の学習内容あり方を考えると、自己理解をしながら、意思表示ができるようにしなければならない。学校にいるときは先生方が考

えてくれるが、社会にできると自分で意思表示がある程度できないと支援が受けられない。学校では、自己理解を進めていく中で、自己選択したり、話せることも大切ということ。支援教育についての在り方については環境構成。その子を取り巻く大人たちの意識をどうとらえていくか、こうじゃなきゃいけないにとらわれ過ぎて、柔軟性に欠けてしまうことが学校にはある。本人の意思や気持ち、心境を考えるとや本人から聞き取って進めていくことが課題ということですね。特別支援教育の枠組みの中には、外国籍の子もおり様々なので、一人ひとりのことを考えていくことが特別支援だけではなく個に対してどうサポートしていくかという観点が課題だということでしょうか。

(井村委員) 自立に対して、皆さんの意見は共通理解が図られていますか。その子に対する自立の意識はどうですか。

(会長) 自立については一人一人違うと捉えている。

(井村委員) その子自身とその子の環境がセットだと思う。その子がどう思うかだけではなく、周りの子どもたちはどう思うのか、その子のことをどう思っているのかというのが子どもを取り巻く社会になっていく。私は福祉事業をしているが、福祉事業者は減っていく。老人介護は増えていく。つまりは、障害を持っている人たちだけの問題ではないということ。障害をもっている人たちと一緒に育ってきた人たちの人権意識は、そうではない人と比べて違う。知識で勉強するだけではなく、一緒に過ごしていることの大切さ。困ったなというときに周りに手を差し伸べる社会であってほしい。周りの子どもたちが育つことも大切。小中学校で共に過ごしながら、どういう関わり方をしてきたかによって卒業後の人生が変わってくると思うので、自立について考えてほしいと思う。

(奥出委員) 心理で支援教育に携わって35年目。当時、「行ってきます」「行ってらっしゃい」と言って支援学級に行けるような環境ではなかった。先生の配慮が後ろのドアに近い所に席を置いて、そっと出ていけるように、目立たないように出てけるようにというのが配慮だった時代だった。そうではなくて、コンプレックスと思うことなく、堂々で行けるようになって、「行ってきます」「行ってらっしゃい」と言えるような環境となった。しかし、いつの間にか、「行ってらっしゃい」と言わなくてはならないような環境となり、非常にびっくりしている。そういった変遷があったこともイメージしてほしいなと思っている。特に中学校の先生について。障害の意識やイメージされているレベルを高く捉えているというか。自分の意思を出すことを育てないと、過剰適応している子もいて、両親の喜ぶことをして、それが自分の生きがいになっている子もいる。本当は嫌だと思っても、実際は自分で選択できないことがあり、そういったことは情動行動、自傷行為が出ることでわかる。しかし、本人は嫌だということを自分でもわかっていない。そういうレベルの子のイメージも持ってほしい。苦手なことを克服したいと思っている子が全体の中でどのくらいいるのか、私はすごく少ないと思っている。こちらの先生のとらえ方が全然違うなと感じたので、もっと全体的な障害のタイプ、課題があることをイメージしてほしいと思う。

(会長) 理念があって始まったことも形骸化してしまうこと、良い子を演じているが疲れてしまう子、それが当たり前と思ってしまう子もいて、それも課題。自立の在り方について、周囲の人たちと一緒にどうしていくのか、インクルーシブな社会でいえば通常の学級と一緒に過ごすこと、一緒に活動していく、みんなが楽しみながら、理解しあいながら進めていければと思います。

続いて、たくさんの意見の中で、課題の解決に向けてどうしていけばいいのかということについて、少しでも方向性を話し合っていければと思います。では、グループ協議をお願

いします。

A グループ協議

(会長) 先ほどの自立ということに向けて、どうしていこうという議論です。これから先の取り組みとしては、どんな視点で学校全体でも社会全体でも結構ですけどもこういうのがあったらいいんじゃないかということなどがあれば、ざっくばらんにご意見いただければという風に思います。

(小出委員) 個のニーズに応じた支援教育のあり方で、個別に合わせて色々やっっていこうと思ったら、やっぱり人がいるかなと思っている。今も教員不足とか色々あると思いますが、とても重要なことだと思っている。先ほどの、枚方の支援教育の制度の中のダブルカウントの説明の時に、教員不足で配置ができないというような話がありましたが、事務局の方どうですか。

(事務局) 現状として通級指導教室の全校設置をめざし、学びの場を充実させていきたいという方向性がありますが、全国的に教員が不足している中で、満足するような状態に配置することについては現時点でも厳しいということであり、それはダブルカウントに限らずということです。人材に不足がなければ、全ての制度について実施することは可能ですが、そもそも人が足りないというところについてはなかなかクリアする点が見つからないということです。

(会長) ダブルカウントというのはどういった制度か確認できますか。

(小出委員) ダブルというのは支援学級と通常の学級どちらにもという意味です。一般的に、支援学級の子は、通常の学級の人数にカウントされていませんが、枚方をはじめ大阪の中でもいくつかの市で、支援学級の子も、通常学級の人数の一人として、カウントされていることで支援学級の児童の人数に関係なく 35 人の学級編成が行えます。ダブルカウントがなければ、通常の学級の子もただで学級編成をしたうえで、支援学級の子もたちが加わるため、実際の学級人数が 35 人を超えることがある。つまり、支援学級の子たちの分だけ増えてしまうということです。

(会長) 支援学級でもカウントして、通常の学級でもカウントするということですね。

(小出委員) 通常の学級でカウントしてくれているので、京都などとは違い、名簿も通常の学級に出席番号順に並んでいます。5・6年生では、この学級は5人支援学級の子がいるから、45人学級とはならず、最大40人で学級編成できます。ダブルカウントがなくなってしまうと、支援学級在籍児童数にもよりますが、40人を超える学級があり得ます。昨年までは2クラスで少人数編成してたのに、急に、40人を超える学級になって、学級があれ状況になってしまう危険性もあります。ダブルカウントは人数のこともありますが、「この子は支援学級の子だよ」というのではなくて、〇年〇組の〇〇さんが支援学級に行っています。〇年〇組の子ですよ。という意識につながっています。今まで、枚方は通常の学級にいるのが当たり前という考えでしたので、ダブルカウントがなくなってしまうと、担任の先生も「支援学級から来ている子がいる」という認識になってしまうことが考えられるので、通常の学級の一人ではなくなってしまう可能性がある。枚方では、通常の学級で一緒に育って、それが良いとなっている。支援学級も通常の学級も関係なく仲間だよねとなっている部分が、別れてしまう意識にされてしまう恐れがある。だからこそ、ダブルカウントを大事にしたいというのは言ってきましたが、なくなるという風な形でさらっと書いてしまうのは受け入れられない。本日の教育委員会の定例会の傍聴にも行きましたが、講師が集まらなかったら、1番目にダブルカウントの教員が配置できない、ダブルカ

ウントの制度自体はなくならないだろうけど、それこそ人が集まらなかったらダブルカウントから減らすしかないみたいな感じに捉えたんですけど、それは間違いでしょうか。

(井村委員) 別にダブルカウント関係なく、どこに対しても先生の数が足りないのはどれも大問題です。

(小出委員) 通級の人数を優先して配置していくことでダブルカウントの配置する教員の数が確保できないので、足りなかったら減らすしかないっていう状況なのかなと。事務局どうですか。

(事務局) 制度上のダブルカウントは継続して残すということはもう前提です。ただ、例えばダブルカウントで今存続している学級があつて 50 学級 あるとすれば、その先生が 50 人集まればそれがきっちりと存続できますが、そもそも先生の募集がなければ存続自体が難しいと。制度自体は継続ですので、人が足りていれば全部クリアできる状態です。

(小出委員) しれっと来年度から足りなかったからなくなるってことがあり得るってことですかね。

(事務局) なくなるということではなく、現実として実施できない可能性はあるということですね。

(小出委員) 先生が足りないからと言って、優先的にダブルカウントがなくなると、先生たちはいきなり 35 人以上学級になってしまうと。講師の先生も業務が多くて大変なのに。ほんとは正規の試験も受けたいけど、年度途中で正規の先生が辞めたから講師の自分が担任になりましたという先生も多分いらっしゃると思うんですけど、本来受けたい試験が準備できなくて受けられないとか、落ちたとかなくなってしまってる現状も結構聞く話ですので、本当は受けたいけど、時間がないから受けられないとか、その余裕がなくなります。第 1 回の時に校長先生も仰ってたと思うんですけど、個々の余裕がないので、個のニーズに応じたものをやろうって思っても、余裕が今より減るんだつたらちょっと難しいなと思うので、解決に向けてということについて結論を言うと、教員の数はできる限り維持すること。今いてくれる人が、ずっといてくれるとも限らないし、教員不足のことを今日聞いたりして、大変な問題だと思います。

(井村委員) 充実というのは、教師がいてこそのことだと思うので、結局、教員を増やさないといけないんですよ。教員を増やすためにどうするかという話で、今の教育のあり方だったら先生たちはしんどくなっている。私も教員の先生をたくさん知っていますが、みんなしんどくなってるんですよ。ギリギリですよ。しんどくなってるのをまず解消してあげないと、支援教育どころではないと思っている。

(会長) 支援教育の充実としては、ダブルカウントというのはできるだけ制度としては残す。

(小出委員) 通常の学級の一人なので、そこを 1 番最初に減らすというのは安易に考えてほしくはないと支援に関わる保護者としては思っている。通級を増やすのも大事ですが、両方あってこそだと思ってる。障害でずっと悩んできている子なので、正直、グレーな子ももちろん大変だとは思いますが、羨ましい部分はたくさんある。でも、障害ってわかりきっている子どもで、どれだけ将来に向けてできることを増やすかという感じなんですけど、学級の一員として入れる期間って全然なくて、義務教育の中だけしか社会を学べないので、一員として今せっかくできているので、そこはなんか継続してもらえたらなという思いですが、今日のどの部分に当てはまるのかちょっとわかんないですが。

(井村委員) 継続するにあたってね、先生の数が足りないと思うんですけど、先生自体が今疲弊してる人がすごく多いので、だからこそ学校の在り方自体を変えていったらいいん

じゃないですかというのが私の意見です。

(会長) 具体的にはどうお考えですか。

(井村委員) さっきちょっと仰っていたと思うんですけど、先生方はこうしなければならないということたくさん持っていると思うんですよ。それを外すとかなり自由にできるんです。こうでなければならないという枠は、重度の障害のある人たちは少ないんですよ。だからそういう子どもたちの感性から学んで、教室にヨギボーを置いたらとかよく言ってますが、そのぐらい今までこうだったっていうのを、ガラッと変えていくつもりで、教育についても緩さをもっと作ってほしくて。今の大人は失敗するとダメだとか、なんでこんなやねんとか言われることが多いと思います。会社でもどこでも。でも、本人が失敗したと思っているんだったら、逆にフォローし合うというような関係を先生たち同士でやっていくとすごく楽になると思うんです。今の学校はそればかりじゃないと思うんです。きっとそういうチームワークが良い学校もあると思うんですけど、そうじゃない学校多いんじゃないかなと思いますし、ちょっと失敗したら、場合によっては教育委員会の方が校長怒って、校長先生が教員に怒ってとか、そういうこともあり得ると思うんですけど。そうじゃなくて、みんなでフォローし合うような関係性を先生たち自身が作っていくだけで、すごい働きやすく変わっていくんですよ。

(会長) 今、チーム学校といって、色々な人が学校の中に入って連携を進めながらということと、コミュニティスクールというのが進められていて、地域の人が入って一緒に学校運営協議会といった組織を作って一緒に学校作りをしていきたいと思いますというのはある。

(井村委員) でも、現場自体はそうなっていますかというところです。

(会長) 学校に地域の方が入って一緒に子どもたちを見るであったりとか、あるいはボランティアという形であったりとか、そういったことが昔はコミュニティの中に学校があって、いろんな交流があったりとかっていう風なことも小さい頃は経験してたりするんですけど、そこがもっと進んでいくと先生たちの生活が良くなる。いろんなことやると、家庭訪問毎日しなきゃいけないとか、それ地域で見てくれるような形になってくと、助かるということであったりとか、地域と一体化していくためにどうしていったら良いのかという風なことが対策としては考えられることかもしれないなと思うんですね。学校だけ変われと言っても、今の人たちの中でしか仕事ができない中だと、なかなかそれ自体が難しくなってしまうと。

(井村委員) 例えば教室にある椅子にちゃんと座って前を向いて、姿勢正してとかというような指導をもしもしてる先生がいたら、それは違うんだよという空気感を醸し出してほしいなというのはあります。やっぱり、もともと保護者なんでね、こんなふうに先生に言われたとか、こんなやり取りがあったよというのは、耳に入ってくる。それで結局、もう学校に行きたくないという風な話とかも耳に入ってきます。娘が重度の知的障害ですが、夜間の定時制の高校行きました。その入学式の翌日に、チャイムが鳴って廊下に茶髪の子が立っていた。そうしたら、そこに担任の先生が来た。私の中学の時のイメージとかだったら、「何やってんの？チャイムなったやろ。入れ。」みたいな指導されてるというイメージがあったんです。でも、その時の高校の先生は、「どうした？中に入られへんの？」とその子に言っていた。それで、こういう指導の仕方をされるんやと思って感動した。そういう形でなんとなくちょっとずつこう変えていくという努力をしてもらっただけで、生徒たちに対してどうのじゃなくて、先生たちが過ごしやすい環境をどうやって作っていくかという話。働きやすい環境を作るために意識を変えると同僚の人にも「そんなんあかんやん」と言うんじゃないかと、「こっちの方がいいんじゃない？」とするようになるだけで、

かなり居心地はよくなると思うんです。お金かからないし。

(会長) あとはね、保護者からの圧力というのはありますよね。

(井村委員) 最終子どもが笑顔だったらなんとかなるんです。1番最初は、ちょっと保護者うるさいなってなるかもしれないですけど、一生懸命子どもを巻き込んで、仲良くしとけばなんとかなる。

(会長) 保護者との連携を進める上で、何かコツというのはありますか。やっぱり笑顔が大事になりますかね。

(小出委員) 今日こんなことができるようになったんですよとか、できたんですよって、ちょっといいところを言うだけで保護者は嬉しいと思います。私は、「こういうの考えてくださったんですか。」と逆に先生の良かったところを言うんですけど。ありがとうございますみたい。「こういうふうに声かけてくださったんですね、ありがとうございます。」と言って、先生が配慮してくださったんだなというところを見つけて言って、なんか、お互いにはないけど、一緒に頑張っているというのは失礼かもしれませんが、大事なのかなと思います。やっぱり、親も先生に文句言ってたら、先生も人間なのでやっぱり良い目ではだんだん見えなくなる。もし、子どもが静かに座ってたとか、そういう良いことを言ってもらえたら、きつい親でもマシになるかなと思ったりするんですけど。まあ、強い人は強いと思うので、肯定的に捉えることや、対応できる先生が1人いると良いですね。

(井村委員) 障害児の親だけじゃないんでね。

(牧村委員) PTAの立場として保護者と関わる部分の意見を言うと、モラルの低下した親というのは非常に増えていると感じる。10年前はどうだったのかなとは思いますが、ここ最近モンスター的な保護者がほんと増えてきています。やっぱり教員の方が、モンスターに言われて萎縮してしまうという話も聞きますので難しいなと思います。私どももその保護者と向き合って話をするんですが、通じないです。自分の子どものことだけ、他の子なんかどうでもいいというものもあるんで、やはり教員のなり手、なりたくないというのが増えてるのかなと。なぜ今、枚方市で教員が不足してるんですか。

(小出委員) 辞める人が多いですか。事務局の方どうですか。

(事務局) 退職者が多いというよりも、いわゆる教員の年齢層が歪になっているので少なくなる傾向にある。年度によって採用の数が固定されていないのはあると思います。上の世代の方々が退職されて、その間の採用の人数が少なければ、分母が減ります。そこまで定数的にきちんと教員数を確保できていなかったのはあると思います。

(会長) あとは、免許更新制というのがあり、免許更新をしなかったという方も結構いらっやあって、たくさん辞めたんです。辞めたんですけども、復活する更新制度がなくなっただけのことですよ。免許を持ってたけどなくなっちゃったと方もいらっやるので、そうすると、働けないのもあるかなという風に思いますね。あとは、マスコミのせいもあると思いますけど、ブラックと言われてると。

(小出委員) 保護者がモンスターになってるのも、少子化やから、その1人の子どもに割く時間とか、すごく大事に思ってる気持ちが強いから、そういうのもちょっとあるかな。でも、やっぱり先生たちも人間なので、どうしていったらいいかっていうのを、保護者に、なにか共有できる手立てがあればいいなというのは思いますけど。

(会長) どこまで何をやるのかというあたりのところというのも大事ではあるかと思えますし、やっぱり抜本的に見直していくというようなことなんかも必要かもしれないです。日本の学校の先生は、いろんなことをしてくれるんですよ。外国行くと、授業終わったら2時とか3時に帰るんです。放課後はもう社会で見てくれるみたいな感じで、ドイツ

とかそうなんですけどね。日本の先生たちは、色々働いている。働き方改革なんかもありますが、まだまだ遅くまで働いているのが現実ではある。まずは色々な連携をとっていく必要がありますが、こういった審議会などをきっかけにして、色々な立場の皆さんにも発信していただいて、子どもたちの理解をどうしていくのかっていうこと、あとはさっきも申し上げましたけど、地域であるとか、いろんな人たちとの連携をすることによって、様々な視点で子どもたちを見てくださるといような、そういった働きかけみたいなことが行われていくと、学校だけで様々な子どもの理解を進めるんじゃなくて、社会みんなが分かってくたさるといことが大事ではないかなという風に思います。学校からも色々発信していくことは今やってるらっしゃると思うんですけど、皆様からの学校の子どもの理解であるとか、支援のあり方であったりとかというようにことについて発信をしていくといようなことだとか、日常的にちょっとずつ行われていくと、例えば、近所の方がよくお父さんのことわかってくれて、色々こう見てくださったりとか、何かしてくださったりとかという風なことが広がっていくといのが大事なのかなと思うところもありますけどね。ありがとうございます。

B グループ協議

(山下委員) 課題解決について意見を交流できればと思います。たくさん課題がありますが、いろいろなアイデアで課題を解決できるような話し合いになればと思います。

(椋山委員) せっかく地域の学校を選んで教育を受けたいと来られた。「ともに学ぶ」といことで、周りの子たちと一緒にどんな風に育っていくのかという視点はとても大切。枚方で何年も「ともに学ぶ」でとにかく一緒にいことに取り組んできたが、それだけでは足りなかった部分があると思う。障害を持っている子自身の力をつけてあげなければならない。社会に出るためには周りの子たちとの関係性も作らなければならない。どちらも大切にしながら何をしなければならぬかを考えなければならない。

(奥出委員) 先生たちは何かをさせてあげたい、自信をつけてあげたいとか、例えば不登校の子に対してちょっと勇気を出して背中を押して自信をつけるという教師もいるが、大人でも準備しているときに後ろから押されたらトラウマになると思う。しかし、それを学校の先生は非常に主張する。自分はこれでいいんだという気持ちを育ててあげることが選択肢を持つことになる。指導は良いことを教わるというプラスの反面、今の自分はこのままじゃダメなんだという意識を持ちかねない。教育は教えてあげるといイメージ。EDUCATION は引き出すと教わった。日本は教育が重い。中にあることを引き出すといイメージを持っていくと昭和の教育のように漢字をいっぱい書いて覚えるとか止めはねをしっかりと覚えさせる、書き順を覚えさせる、汚かったら書き直しをさせるとかという当たり前前にされてきた教育は、すべてマイナスなんだといこと。漢字を覚えられない子を検査すると、間違くと膝を叩かれて育ってきたことがトラウマになっている子がいて、漢字を書こうとすると膝が痛いとい子もいて。例えば一年生はマス目に書いて練習するが、お手本と見比べたときに対称を理解していないと書けない。線が多くて余計にわからない。大人にとっての習字の手法であって、新しい文字を獲得する術ではない。当たり前とおもってきたことは、子どもにとって良くないこともあるので、解決策として当たり前にとられないようにしてほしいなと思っている。

(山下委員) 確かに、小中高と育ってきた子たちが疲れ切って大学に来ている。もっといろいろな道があるのに、踏み出せない大人になってしまっている。小さな年齢の時から、自分の良い所を醸成できて醸し出していけるようなことが自立活動でなければならない

と思う。自信がつけばもっといろいろなことにチャレンジできる可能性はある。そういうことを体験したり、経験したりすることが自立活動であればいいと思う。

(奥出委員) 自信をつけるということであれば、先生からすると克服すると自信がつくという概念がある。それも一つだが、できない自分もよく頑張ったねとか、これは嫌だといったときに嫌を受け止めてもらうとか、親御さんに駄目だといわれると自信はなくなる。嫌な時は、これは嫌なんだなと受け止めてもらう、肯定してもらうことが一番の自信になると思う。肯定されないと他人を肯定できない。中学校の訪問で見たときに、何を答えても「おー」というような場面があったが、あれはとても良かったと思う。将来社会に出るからこれをさせなければではなく、社会に出る時には、一年後二年後にはその子なりに成長しているので、その時のその子に任せましようって。今、十分に先生方に褒めてもらったり親御さんに褒めてもらったり、肯定される体験が自信になると思う。

(野口委員) 具体的な提案として、個別の支援計画についてお伝えしましたが、例えば私がかかわっている学校だと、本人が個別の支援計画や指導計画の作成会議に参加しているところがある。本人も含めて自身の計画を考えていく。重度の障害のある子で、音声言語で難しかったりする場合もあるが、そういった場合は、意思決定として視覚支援を用いたりその子自身の行動観察の結果に基づいて、その子自身が自己肯定感を下ないように考えていくようなアイデアがあるのではないかと思う。

(小寺委員) 今後の在り方、会議も含めてですが、重層的支援体制整備事業というものがあり、行政も含めて縦割りをなくしていこうという考え方。私は枚方市と交野市でかかわっていて、断らずにつないでいくことで相談事業を一本化していく、社会参加を促進していくもの。子どもの相談、障害者の問題、高齢者の問題、生活困窮の問題などを一本化していくというもので、国も力を入れていて文部科学省も言っている。引きこもりやヤングケアラーなどの教育の問題も含めて相談体制を一本化していく。社会参加、意思決定支援、できるだけバリアをなくしていく取り組みがあり、枚方市も機構改革をして取り組んでいる。すぐに問題は解決しないが、教育も一緒に課題解決していけないかなと思っている。

(椋山委員) こう言った話をしていると、様々な専門家がいろいろな観点から一人の子どもについて多面的、多角的な意見を述べてもらえるのでいい場だと思う。

(内田委員) 子どもに「何をしたい?」「何ができるようになりたい?」と聞いても、「わからない。」「別にない。」と言うことが多く、言えない子だらけでそんなものだと思っていたが、それではいけないと感じた。

(奥出委員) 支援学級を利用したほうがいだろうなと思って親御さんに伝えると、絶対に嫌だ、そんなところには入れませんという家のお子さんは、絶対に嫌だというんです。あるいは、一年だけと行って入級しても、今度は一年で出ないといけないと子どもが言う。実際は自分のペースでできることが増えて楽しくなっている。結果、どうして出ないといけないのかなあということもある。私は、子どもの思いと親御さんの思いをつなぎたいと思っている。親御さんの意見も大事だが、子どもはそう言いなさいと言われていたこともあるが、できるだけ選択肢を与えてあげることも大切。なんでも嫌だ嫌だという子もいるが、そんなに嫌じゃない子もいるので、自分で選択したことを否定しないで認めてもらうことで自信がつくこともある。4年生くらいまでの知識があれば何とか社会でも過ごせるので、それよりもソーシャルスキルで受け入れてもらうことや、仲間を大切にすることを重点的に、低学年から力を入れてもいいんじゃないかなと思っている。

(会長) それでは、発表をお願い致します。

A グループ発表

(事務局) 個のニーズに合った支援の在り方について。人材の確保をどうしていくか。教員が魅力を感じる職場でないといけない。ダブルカウントという制度がなくなるという質問があったが、制度自体はなくなるが、教員不足の観点として結果として集まらなければ運用が難しくなるかもしれないという確認だった。しかし、集まらなかったから仕方がないではなく、どのように人材を集めるかが大切。教員の業務負荷について。学校の在り方を変える必要がある。こうでなければいけないというしぼりがあるかもしれないが学校の裁量を柔軟にすることや自由度を高めることが必要。保護者とのかかわりについて。先生から保護者だけではなく、保護者から先生へのコミュニケーションで、お互いに認め合えるような関係が大切かなと。学校で人材を集めるのは大変であるので、コミュニティスクールが活用されればという意見があり、子どもは地域で育つので、様々な視点でかかわって育てていければよいという意見だった。

B グループ発表

(事務局) キーワードは自信をつけさせること。教員や大人が、本当の意味で子どものためになっているかという姿勢を作っていくことが解決への方策という意見。具体的には、ほかの子どもたちとどうかかわっていくかという視点を必ず持たなければならないことや、教員は必ず何かを克服させたいであるとか、自信をつけさせてあげたいという思いでかかわるが、スキルを与えるよりも、これでいいんだよという気持ちを大切にすることも大切。今の自分がだめだという意識を持たせるのではなく、子どもの中にあるものを引き出すという意識をもって子どもとかわっていくことが大切。教育のあたりまえが子どもにとってマイナスになっていることも意識することが大切。小中高と育ってきた子どもたちが疲れ切って大学に来ている印象もあり、自分の良い部分を醸成していくことが自立活動でできればよいのでは。克服が自信になるのではなく、自立活動ではできない自分も受け入れて認めてもらうような関わりが必要。個のニーズに応じた支援教育の在り方について。個別の支援計画、指導計画において、本人も含めた参加型で行うことも具体的な実践事例としての意見。一人の子どもに対して多面的、多角的な議論が解決の方策として大切。重層的支援体制整備事業を生かして、相談体制を一本化していくことも大切だという意見だった。

(会長) 私は教員養成の立場でもありますので、教員の話聞くことも多いですが、保護者やPTAの方など、視点が変わると捉え方が違うというのは大切なポイント。子どもたちを考える時に、教育の観点だけではなく、関わる人たちと考えていくことが大切なポイント。非認知能力が大切だと言われているが、自分の良さに気づいて、自分で自信を持って取り組もうとする、粘り強く取り組む、仲間と一緒に取り組んでいくという力を培っていくことが、認知能力を育むことと同じように大切だと言われています。学校という子どもたちが成長発達する現場で認知能力という側面に視点が行きがちですが、先ほど挙げた非認知能力を育てていくことがとても大切で、そのためにはどうしていけばいいのかなということが審議会の議題にもなっていくと思う。教師はティーチングではなく、コーチングが大切ではないかという意見もあり、教えるのではなく、子どもたちが自分で気づいて何かをしていく、そのために、子どもの意見を聞く、先生から質問する、やり取りをしながら子どもたちが新たな視点である考えとか整理していくことでこうしていこうと決定し

ていく。その時に先生は背中を押してあげる。達成感を感じると子どもは前に進めるし成長を感じるということが取り上げられています。子どもたちがよりよく自分らしく生活していくためには、型にはまることではなく、自分がどうなっていきたいのか、どうしたいのかを意見を聞きながら寄り添い、かかわる大人がコーチングすることが必要ということではないかと思います。学校は教師が強くて子どもが…となりがちですが、教師も子どももWIN WINであることが必要で、そうすることで先生方の疲弊感も減っていくのではなかと考えます。支援が必要な子どもたちがいることは事実ですが、子どもたち一人一人が自分はこの支援があればこういうことができるというふうにつながる支援であってほしいと思う。子どもの気持ちに寄り添っていくこと、教師も自分らしさをもってかかわっていくような方向性を見つけられたらと思います。

今日の中では、具体策とまではいかなかったかもしれませんが、大切にしてほしいことやこれまでの枚方の良さもあったと思います。支援学級が安心できる場所であってほしいということや、落ち着けるような環境であってほしい、そのために人材をどうしなければならぬというような課題もあったかと思います。型にはめず、子ども一人一人を大切にしていくことはずっと昔から大切にされてきましたが、どのように具現化していくかを審議会でまとめていければと思います。学校だけが変わるのではなく、枚方市全体を変えていこうという思いをみなさんで持っていきましょう。

(会長) それでは、第2回枚方市支援教育充実審議会を終了します。たくさんのご意見ありがとうございました。長時間にわたりありがとうございました。

<閉会>